

ビフテキは美婦的と明治調 ひよどり越えのピシテキも

「ビフテキと洋語も少し食いかじり」

と明治の川柳もイキがったビフテキ。そのビフテキとは、はたして何語なのか。ある語源研究者も「ビフテキか、ビステキか、それともビステックかビーフステイクか」といささかとまどい気味。一般人がようやく洋食を口にしはじめた明治十年ごろには、漢字で「美婦的」の字を当てる漢詩人もいたとか。

ちなみに、ビフテキないしはビステキに対応する外国語は、

○英語がビーフステイック ○フランス語がビフテック

○スペイン語がビステック ○イタリア語がビフテッカ

などだが、漢字の当て字の「美婦的」が登場するより一步はやく、明治八年、芝、浜松町に開店した牛鍋屋「たむら」の開店広告では

「御懇意の皆様方のおすすめにより、開店初日より牛の力の御ひいきを受けてにぎわう当店——と自慢の料理や酒を披露した中に

●牛鍋御一人前 四銭 ●ロウス・ビステキ 五銭 ●シチウ 三銭 とあり、

当時、ほとんど同時にビフテキとビステキの表記が併存していたことがうかがえる。それ

ばかりか、明治五年、洋風化の機運を受けて京都で発行された「肉料理大天狗」なる風俗本では、各種の肉料理を牛若丸の物語に見たてた中で「ひよどり越」一名「ピシテキ」とあるから、びつくりすると同時にほほえましくなってくる。

また、明治七年、服部誠一なるご仁によって書かれた「東京新繁昌記」を見ると、当時の西洋料理店の繁昌ぶりを描いた中に ○コーヒーが滑比 ○バットケーキが巴的筈布 ○スープが蘇伯 ○シチューが細底幼 ○サラダが撒拉托等々当て字が並ぶ中に、ビフテキを「ビーステキ」と称して「擺斯鉄」の文字を当てているのにはむしろ脱帽したいくらい。

といった次第でビーフステーキを略してビフテキとしたのはどこの誰が考えついたことか。いまは亡き料理史通の浜田義一郎氏によると、こういう言葉遊びはコックや料理人の好んで試みるところで、ハッシュドライスやハヤシライスと称するように、ビフテキやピステキも同じ手口ではないかと。

ワンポイント知識

「消費期限」や「賞味期限」はどのように決めているのか？

期限の設定を適切に行うためには、食品等の特性、品質変化の要因や原材料の衛生状態、製造・加工の衛生管理の状態、容器包装の形態、保存状態等、その食品に関する知識など様々な情報が必要になります。「消費期限」や「賞味期限」は、製造業者等が科学的・合理的な根拠に基づいて自らの責任で行っています。